続 徒然 つれづれ

プロ野球は花長風月か

桑野　巍

私がプロ野球のキャンプを自分の眼で見たのは昭和23年春だった。当時クリクリ坊主の中学生でスポーツ少年だった。田舎（浅口市金光町）の母校所有のグラウンドに松竹ロビンズ（後の大洋、現横浜ベイスターズ）がテントを張っていた。投手のボールの速さ、野手のグラブ捌きとスピード感にしばらく見入った。グラブ、ボール、バットもない終戦直後のころとはいえ野球というスポーツに憧れ、プロ野球のすごさに取りつかれた。

次に公式戦を見たのは昭和24年夏で、大阪に勤務していた兄の家を訪ねた時だった。西宮球場で阪急―金星のゲームを観戦した。阪急の天保、金星のスタルヒンが登板、スピードボールがうなりをたてているのを目の当たりにして興奮気味だったことを記憶している。その後プロ野球も２リーグ制となり、毎年話題を提供してくれるが、あれから60年余りどのチームのファンということなしだけれども興味を持ち続けながら注目している。

毎年数回球場に足を運んでいたが今年はＴＶ、ラジオで楽しんだ。入場料金が高いということと歳のせいで足が遠のいたのだ。開幕が遅れたこと、使用ボールが変わったこと、観客数が減少、ＴＶ中継の減少、関西チームの弱体化や、各球団の経営面の悪化など場外から見させてもらった。熱狂というほどではないがファンの一人としてドーム球場の電力が気懸かりだったが何とか克服した。

しかし、ドーム球場は雨の日でも開催できるという利点は貴重だが、自然の風がなく人工芝で面白味が半減する。球場は土と天然芝の上でイレギュラーバウンドのボールを選手が捕らえ「さすがはプロ」を発揮するのが面白いのだから、私はドーム球場反対派だ。野球の本場米国の露天、天然芝球場とドーム球場の割合も調べてみたい気もする。

ＴＶ観戦で感じたことは解説者の声は不必要、とくにごますり男が多く邪魔、アナウンサーひとりで十分。監督、コーチ陣の指揮力の弱さも見えた。「負けたら俺の責任。勝ったら選手諸君の力」という権力者が極めて少ないことも残念だった。かつての名監督は①選手を褒（ほ）めまくる②わけ隔てをなくする③負けたらベンチが責任をとり続ける――と言っていたが“お友達人情内閣”のリーダーはどうあるべきなのだろう、これが日本式か。

ではフロントといわれる会社経営陣はどうだろう。総務経理を預かり、営業にチエを出し、ひたすら黒字化を気遣っている。個性が強い選手（個人営業者）の結束力、指導力に注力し、観客動員の増加に重点を置く。外国人選手獲得、新人育成などベンチとの調整を図り、選手の契約更改にも直接タッチするからフロントはチーム運営の三本柱の一つだ。

選手は表舞台で自分を売り込み、持ち味というか実力を発揮するのが仕事。決められた時間より早く球場入りするのが通例で練習を始め、他の選手と競争する責務がある。

その昔「ボールが自分の所に飛んでくるな」と考えていた選手も現われたという逸話を耳にしたこともあるが、こんな優雅な選手は今はいない。名将といわれた西本監督は球場に着くと、選手の体調を見たあと①気持ちで負けていないか②心にスキはないか③準備を怠っていないか、を観察して戦いに挑んだと聞いた。怠慢と闘争心不足は禁物ということだ。

プロ野球は少年やファンに夢を与えてくれるが先行き心配な面もある。それは年俸の高騰だ。プロスポーツ選手は寿命が短いが甘えが強過ぎる。メディアが甘えを助長したという説もあるが、一生働き詰めの公務員からみると羨ましい限りだろう。花やかな職場で長い休暇があり、風格もあり、月給も高いという花長風月のプロ野球界だ。ピンチを招かないためにコミッショナー、経営者の努力を期待したい。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）